

臨床直結！解剖学講義&深掘りディスカッション 下肢編

荒川高光・著

【評者】 黒田良祐 (神戸大学大学院整形外科・教授)

B5判・196頁
2025年10月
定価：5,280円
(本体4,800円+税10%)
ISBN978-4-260-06019-6
医学書院 刊



本書は、解剖学者と理学療法士が真正面から向き合い、臨床の現場で本当に必要とされる知を磨き上げていく、極めてユニークで刺激的な一冊である。PT界を代表する解剖学エキスパートである荒川高光先生が、膨大な領域から“臨床で使える本質”を抽出して講義し、それに対して工藤慎太郎先生をはじめとした運動器理学療法のスペシャリストたちが、臨床の現場から生まれた鋭い疑問を容赦なく投げかける。

議論の中心には、筋・骨格・神経という構造の理解を、患者の症状や動きと結びつけて再解釈しようとする姿勢がある。トリガーポイントや疼痛発生機序といった、整形外科でも日常的に直面するテーマが深く掘り下げられ、臨床家が抱きがちな「この症状はどこから来ているのか？」という疑問が、対話のなかで徐々に解きほぐされていく。読者はそのプロセスを追体験することで、まるで自らがディスカッションに参加しているかのような臨場感を覚えるだろう。

整形外科医として本書を読むと、その価値は一段と明確になる。私たちが日々向き合う患者の訴えや動作異常は、画像に写る構造の異常だけでは説明できない複雑さを内包している。本書は、そうした“説明しきれない部分”を埋めるための視点

を豊富に与えてくれる。筋・筋膜・神経といった要素を「機能的ユニット」としてとらえるアプローチは、触診や動作観察に直結し、診察の精度を高める極めて実践的な思考法である。特に若手医師にとっては、机上の解剖学と臨床所見が一本の線でつながる体験となり、診断プロセスそのものが大きく変わるはずだ。

本書のもう一つの魅力は、専門領域の異なる視点が交わることで生じる“知の化学反応”にある。解剖学者の理論的な視座と、理学療法士の臨床的・運動学的な視座がぶつかり合うことで、双方だけではたどり着けない新たな洞察が生まれていく。その熱量は、本書が単なる解説書ではなく、学際的な創発の場として機能していることを実感させる。

総じて本書は、臨床における解剖学の意味を再定義する一冊である。疾患を「構造の異常」としてとらえるだけでなく、「動きの破綻」として理解する視点を養うことは、今後の運動器診療の質を大きく左右する。本書はその視点を強固に支える教材であり、医師と理学療法士が共通言語をもって患者を理解するための貴重な架け橋となる。臨床解剖学が“今”必要とされる本質を体現した、まさにぞくぞくするほど刺激的な一冊である。